
私と幼馴染の観察処分者

黒猫in軒下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と幼馴染の観察処分者

【Nコード】

N4361Y

【作者名】

黒猫in軒下

【あらすじ】

吉井家の隣に住む少女宮野唯は明久の幼馴染。バカな明久やその友人たちに振り回されつつも学園生活を送っていきます。

プロフィール？（前書き）

趣味と暇つぶしを兼ねて書いた文です。感想などあればぜひ、願
いします。

プロフィール？

みやの ゆい
宮野唯

身長154cmで胸はD。

髪の色は薄紫で瞳は赤。

両親は物心つく前に離婚していて、母方の下で生活。

やや、ドジな所もあるものの本人は認めていない。

母は仕事で忙しいため家事もそれなりにできる。

吉井家とは隣で付き合いも長く、明久の両親に面倒を見てほしいとの頼みを受けているため合いカギを貸してもらっている。

かなりのゲーオタで買ったゲームは諦めないというポリシーをもっている。

エロの方向に対して耐性が微塵もなく保健体育の点数は1桁となっているが、それ以外の科目は一部を除き、Cクラスレベル。典型的な理数系で物理限定で400点オーバー。文系はFクラス程度。

振り分け試験の前日に母が倒れてしまい看病していたため、試験を受けていない。

召喚獣の装備はゲームやアニメのハマりすぎの為か、ガダムのビームサイズが武器。

腕輪の力でハイパージャマーを使用可能。

みやのなみえ
宮野波江

唯の母。年は31歳である。

唯が生まれて間もなく旦那と離婚しており、ほぼ女手一つで唯を育ててきた。

吉井家とは古くから交流があり、助けてもらったこともある。

ゲームなどにハマりすぎる娘を心配しつつも、温かい目で唯を見守っている。

第一話（前書き）

感想などあればぜひお願いします。

第一話

バカテスト 化学

調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料にえらんだところ調理を始めると問題が発生した。この時の問題点と代わりに用いるべき金属合金の例を一つ上げなさい。

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。
合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄では駄目だというひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（ 凄く強い ）』

教師のコメント

凄く強いと言われても。

宮野唯の答え

『デブスライト鉱石』

教師のコメント

先生も集めるのに苦労しました。

「よし、お母さん、行ってくるね！」

「気をつけてね」

お母さんに見送られながら、幼馴染で隣に住んでいる明君の家に向かう。

去年から大抵一緒に登校していたけど、どうやら今日は・・・寝坊してるみたい。新学年そうそう寝坊って・・・大方ゲームでもしてたんだろうな。

「明くん。寝坊だよ（ドンドン）」

『・・・・・・・・グウ・・・・・・・・』

扉を叩いても反応がないどころかいびきまで・・・勝手に入るのは明君に悪いけど寝てる明君が悪いよね。

ドアを開けて部屋に入るとかなり散らかっていた。これじゃ足の踏み場もないよ・・・明君のベットに近づくと、何かを踏んで

「きゃあっ！？（ズルッ）」

思いつきり尻もちをついてしまう。ホントに足の踏み場がないよ・・・とりあえず踏んでしまったものを見ると、

エロ本

「いやあああああああああ！！！！（ブンッ）」

明君のエロ本だと解った瞬間無意識に持っていたそれを明君になげる。当然それは明君に飛んで行つて

ゴッッ

「いったあああ！？なにになに！？なんなのさ！？しかも僕の参考書（エロ本）！？それと唯！？やばっ！これを速く隠して・・・」

「速くそんなの捨てて準備してえー！ー！」

「は、はいっ！」

あわただしく明君の朝が始まるのでした。

「ほら、急いで明君！遅刻しちゃうよ！」

あれから5分後、私たちは文月学園に続く坂を走っている。もう10分切っちゃったし・・・

「ハア、ハア・・・砂糖が切れてるなんて最悪だよ・・・」

「最悪なのは明君の食生活と成績でしょ！・・・明君の料理美味しいのに・・・」

「唯、ここで僕を貶す！？それと唯が間違えて姉さんのセーラー服を出したのも原因だから！去年も同じようなことがあったきが・・・」

「・・・・・・・・」

そんな事実は確認されてないもん・・・
ただ、このやりとりの間に文月学園に到着できたから先生に挨拶をする。

「て・・・西村先生おはようございます」

「てつじ・・・おはようございます」

「おう、宮野と吉井か。おはよう。・・・お前たち鉄人っていいか
けなかったか・・・」

「アハハ。気のせいですよ」

「む？ならいいが・・・」

あやうく鉄人って呼ぶところだったよ・・・

「ほれ、クラス分けの通知だ。・・・宮野、残念だったな」

「確かにFクラスは不安ですけど、お母さんの方が大事ですし」

実はお母さんが倒れたからその看病で振り分け試験を受けていない。
Fクラスは少し不安だけとお母さんが元気に回復したんだから後悔
はしていないし、明君には悪いけど多分明君もFクラスだと思うし。

「そういえば波江さん大丈夫だった？まあ、僕はDクラスあたりに
入ると思うから唯とはお別れだね」

その自信はどこからやってくるのかな？すると西村先生が急に話し始めた。

「吉井。今だから言うがな」

「？何ですか・・・なかなか開かないな」

「俺はお前を去年一年間見てきて『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いていたんだ」

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、『節穴』なんてあだ名をつけられちゃいますよ？」

「そういえば振り分け試験は上手くいったみたいなのを言ってたっけ。ストライカーシグマVとか使ってなきゃ良いんだけど・・・」

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気づいたよ」

「そう言ってもらえとうれしいです」

明君は丁寧に開けるのを諦めて上の部分を破って、通知の紙を取り出した。

「喜べ吉井。お前への疑いは無くなった」

そこにはやっぱりFの文字が大きく書かれていた。

第二話（前書き）

申し訳ありません！テストなどで忙しく…では、どうぞ。

第二話

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』

『(2) 悪いことがあつた上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『(1) 弘法も筆の誤り』

『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（２）泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

宮野唯の答え

『（２）踏んだり蹴ったり（この前明君が小銭を落として屈んだときに車に水を思いっきり撥ねられた）』

教師のコメント

吉井君には悪いですが体験談で覚えたようで良かったですね。

「……なんだろう、このバカでかい教室は」

「ここまで凄いと逆にＦクラスが心配だよ・・・」

去年は全くと言っていいほど来たことのない三階に行くと思に入ったのは並みの五倍はあるんじゃないかって思うほど大きな教室だった。大きな窓から中を覗いてみるとみると、眼鏡をかけてスーツを

着こなしたいかにも「知的！」な感じの先生がいた。…ん？

「これ遅刻してるよね！？明君、走るよ！」

「これがAクラスかあ。え？……先生がいるってことは…わあああ！」

思わず教室に見とれてしまっていたけど、先生がいるってことはほぼ遅刻だということ。せめてこれ以上遅れないようにFクラスがある旧校舎へダッシュ。朝から続けてのこれは大変…！走っている間にFクラスの教室前にやっと到着。

「ふう〜。やっと着いた　　って言っているのかな…？」

「私たち異世界に来たっけ？」

とても教室と認めたくない外観の教室（？）に着いたのは良いんだけど…ここはやっぱりFクラスなんだね…クラスが書いてある木のプレートなんて今にも落ちそうだし。

「…ここにいてもしょうがないから入るっか」

「う、うん」

教室についてはともかく、一応遅れてるから謝りつつ入る。

「すみません。遅れちゃいました…」

「早く座れウジ虫や　　ハッ！？唯か！？」

「雄二君！？Fクラスだったん　　違う！私悪いことした！？」

待っていたのはゴリ…去年のクラスメイトであり、男友達の雄二君の罵声。恨まれるようなことをした覚えは無いんだけど…

「ち、違うぞ！これは明久にだな」

「美少女に罵声を浴びせるとは…死刑！」

「『死刑！』」

「ちょ、待て、お前ら！ギャアアア！！！」

あっという間に覆面集団に飛びかかられて集団リンチにあう雄二君。というかクラスの大半にボコボコにされてる…

「どうしたの唯？」

すると遅れながら明君が教室の中に。

「えーっと、実はかくかくしかじかで」

「唯！悪かった！謝るから助けてくれ！明久も頼む、助けてくれ！」

「ふむふむ。…くたばれ雄二いいっ！」

「ギャアアア！！！」

説明を聞き終えた明君は雄二君を助けることなく、むしろ攻撃を始めた。とうかさつき貶そうとした明君に助けを求めるって…雄二君の思考回路はいまだに読めない。

「すみません。ちょっと通してもらえますかね？」

クラスの皆が雄二君に制裁を加えていると、覇気のない声が響いてきた。

振り向くと、失礼だけどもさえない感じのオジサンが立っていた。どうみても生徒には見えないから多分このクラスの担任なんだろうなあ。とにかく近くの席(?)というか床に座る。

「おはようございます。二ーFの担任の福原慎です。よろしく願いします」

福原先生は薄汚い黒板に名前を書こうとしてやめた。チョークすら用意されてないってここは学校なのかな・・・

「皆さん全員卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください」

これに不備が無いと言い切る人はまともじゃないよね。畳とかを新調したら良い教室になる気がするんだけどなあ。

「せんせー、俺の座布団に綿が殆ど入ってないです」

「あー、はい。我慢してください」

「先生。窓ガラスが割れてて風が寒いんですけど」

「わかりました。あとでビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

どうやらこの学園は意地でも状況を変えるつもりが無いみたい。と言うかこのやりとりって必要だったの？呆けていると隣の明君の卓袱台の脚が折れた。

「せんせー。僕の卓袱台の脚が折れたんですけど」

「我慢してください」

「無理だつてのー!」

流石に無理がすぎるような…

「はっはっは。冗談ですよ」

良かったあ。流石にこれは変えてもら

「木工用ボンドが支給されていますので後で自分で直しておいてください」

…お母さん。私は転校したくなってきたよ…
学年の底辺のFクラスは厳しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4361y/>

私と幼馴染の観察処分者

2011年11月21日18時14分発行